

土御門第跡

藤原道長は平安時代中期に摂政と太政大臣を務めました。その邸宅は南北 2 町にわたり、「上東門第」や「京極第」の呼び名でも知られています。道長の長女彰子が一条天皇の中宮となったため、この地が御所となりました。彼らの息子である 2 人の天皇、後一条天皇と後朱雀天皇はここで生まれました。そして、道長の三女が中宮となったとき、道長は次の有名な歌を詠んでいます。

この世をばわが世とぞ思ふ望月の欠けたることもなしと思へば

（小右記：藤原実資の日記）

和歌を詠むことは宮廷やその周辺に暮らす貴族達の文化生活において、中心的な役割を果たしていました。彼らの暮らした邸宅は現在ほとんど残っていませんが、彼らの残した和歌は、彼らの優雅な生活を垣間見る窓口となってくれます。和歌というのは、その多くがしばしば恋の苦しみや命のはかなさに思い悩むものです。一方自身の権力の喜びを歌った道長の歌は、即物的な権力や富を素直に称賛した点で特異です。